



TITLE:

<批評・紹介> 傳芸子著「正倉院考古記」

AUTHOR(S):

長廣, 敏雄

CITATION:

長廣, 敏雄. <批評・紹介> 傳芸子著「正倉院考古記」. 東洋史研究 1942, 7(1): 50-51

ISSUE DATE:

1942-05-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/138814>

RIGHT:

批評・紹介

正倉院考古記

傳芸 子著

昭和十六年六月一日 文求堂發行
四六倍判、本文九八頁、圖版二八
附索引、定價五圓

著者傳先生は十年間京都に居て最近北京に引揚げられた。滞日中の先生は嚮きに日本の舞樂に關する論文を書かれ、最近では支那近世戲曲史に關する論文を書かれた。正倉院考古記はその中間の時期に著述され、先生にとつては滞日中で最も努力された業績である（もつとも支那語學の教師としての先生には支那語教科書の執筆及び支那語發音に關するレコード吹込みがありこれまた特筆に價する）。

傳先生は自らも美聲を持つて居られて、昆曲を唱されても、仲々立派である。先生は令弟惜華先生と共に崑曲保存に就いて北京で奔走されて既に久しい。廣い意味での藝術愛好家であり文人である。

正倉院考古記が、この著者に依て纏められたことを想像すれば、人はそれがどんな形で叙述され説明されてゐるか、また著者が如何なる意圖で本書を作製せられたかを多少感ずる筈である。

正倉院の尊さに就いては、言ふだに畏き極みである。この淨域に入つて御物の一つ一つを拜觀し能ふといふことは、國民にとつて無上の榮譽でなくてはならぬであらう。傳先生が外國人としてこの拜觀を許され、驚異と讚嘆とを以て階を上つたことは想像に餘りあり、先生はこの自分の感激を追感しながら叙述をすゝめてゐるのは、本書の最も美しい個所である。

本書は一正倉院之由來、二正倉院之價値、三正倉院之觀覽、四三倉之概觀、五結語の五章に分かれ、圖版二八、本文中挿圖二五を收め、卷末に索引を附し、入念な編輯を以て正倉院の姿を紙上に寫さうとしてゐる。蓋し今日まで大冊東瀛珠光（六冊）か最近の正倉院御物圖錄を除いては雜誌「東洋美術」正倉院之研究（特輯號）「ぐらゐ」のもので、正倉院に關する纏つた單行本は無かつた。従つて傳先生の本書は漢文で書かれては居るが、中國人のみならず内外人誰にでも好箇の案内記をなすと考へられる。

右に述べたやうに、本書は正倉院そのものを忠實に紙上に再現しようとしてゐる。北倉中倉南倉の一々の御物に瞻目する著者の目の輝きを、のちに追感しながら、更にそれらの印象の外郭に學者的考察を被せようとしてゐる。従つて或は樂器類（琴琵琶、笙など）の箇所、或ひは其他の工藝品に接しては一々古籍を引用し、また從來諸學者の論じた要點を迷さず參照し、そ

の源流をなす唐文化や唐風俗を想起してゐる。支那に既に亡び而かも我が邦には今尙残れる文物を見ては、この中國の學者に一入感慨深きものがあつたことと思はれる。

かく御物の工藝品樂器等を史學的に考證する箇所では、さしたる斬新な考へも見當らぬ。但し細心なこの著者のこととて、克明に従來の諸説を擧げてゐる。この入念さには、傳先生の美術、歌舞、文學の各界に理解を持てる人柄が見られて、他の追従を許さぬものがある。

日本に滞在した記念の著述として正倉院考古記の如きを纏められた傳先生は、賢明な人だと思ふ。正倉院は我が國の至寶だからであり、諸他さまざまな美術品古遺跡の考古記とは比ぶべくもない存在だからである。先生の滯日學究生活はまことに饒り多かつた。北京に留學して吾が師友たちが北京故宮考古記といふものを今日まで纏めなかつたのは、何故であつたらうか。

〔長廣敏雄〕